

古くて新しい 日本とベトナムとの出会い

ベトナムは日本と非常に近い、面白い国である。私は、学生時代、東シナ海文化圏、南シナ海文化圏を研究する中でそう思った思いを強くしてきた。モンゴル斑が二〇〇%出る国は世界に三つしかない。ベトナムと日本とモンゴルである。ベトナムの中部、ダナン港近くにある世界遺産の街ホイアンには、「日本橋」という橋がかかっている。ベトナムと日本は偏西風でつながっており、一六三三年に徳川家光が海外帰国禁止を出すまで、日本人や沖繩の人々が南シナ海を走り回り、ホイアンには日本人街ができて賑わっていた。ベトナムでは、海の大国日本、陸の大陸中国という

明確な認識が定着している。日本とベトナムは、私たち日本人が知っている以上に長い交流の歴史があり、私たちが知る以上に、ベトナムの人々は日本を知っている。私が大蔵省(当時)主計局の外務係、経済協力係の予算を担当していたころ、偶然にもベトナム難民問題が発生し、受け入れの施設建設に携わつ

た。そうしたご縁もあり、JICA(国際協力事業団、当時)の日本語センターで日本語教育のボランティアを続けてきた。国税庁長官時も、退官後はボランティア活動としてベトナムに貢献したいという思いがあった。ベトナムのニン国税庁長官(当時)とのよい出会いにも恵まれ、ベトナムに税理士法をつくり、所得税法を改正して所得税をつ

社のうち、わずか六〇万社程度に過ぎない。残り七四〇万社は、必ずしも簿記に精通していない地方税務総局が見ているため、推計課税により間に立てた税理士が行っているのが実態だと思う。そうした経緯と状況の中で、ベトナムで税理士法ができた以上は、複式簿記を普及するのが私の使命であると考えた。ベトナムのクック国税庁副

ベトナムの 日本語による複式簿記 普及活動について



大武健二郎氏
元国税庁長官
大塚ホールディングス株式会社代表取締役副会長
NPO法人ベトナム簿記普及推進協議会理事長

くるお手伝いをした。

ご承知のように、イタリアで始まった複式簿記は残念ながら、いまだアジアに普及していない。したがって、「所得」という概念が一般には理解されていない。そのため、例えば中国では外国企業の所得税については国家税務局が管轄して簿記に基づく課税を行っているが、それは中国にある約八〇〇万

長官が会長を務めるベトナム税理士協会とコラボして、NPO法人ベトナム簿記普及推進協議会が活動を展開。大塚簿記の講師を派遣する傍ら、今、私も毎月一度ハノイに渡り日本語で複式簿記の授業に携わっている。

なぜ日本語による授業が可能かと言えば、ベトナムでは、二〇〇三年から英語、フランス語、ロシア語に加えて日本語が第一外国語となり、日本語ブームが沸き起こった。ベトナムでは中学校から日本語を学んだ若者が多くいるというのも、日本人が知らないベトナムの姿だ。

超高齢社会のパートナーとして

今後、日本は超高齢社会を迎える。日本は二〇〇〇年には八〇〇万人だった七五歳以上の高齢者が、現在、三〇〇万人、二〇二五年には二、二〇〇万人となり、五人に一人が七五歳以上となる。さらに二〇五〇年には人口九、〇〇〇万人の

●プロフィール(おたけけんいちろう氏)

1946年東京都出身。東京大学卒業後、大蔵省(現財務省)入省。大阪国税局長、大臣官房審議官、国税庁長官を歴任。退官(2005年)後は、商工組合中央金庫副理事長、大塚製薬顧問を経て、現在、大塚ホールディングス株式会社代表取締役副会長。【現職】大塚ホールディングス株式会社代表取締役副会長ベトナム簿記普及推進協議会理事長、TKC全国会会長、関西大学経営審議会委員・客員教授、ビジネス・ブレイクスルー大学大学院客員教授、税務大学校客員教授、人事院公務員研修所客員教授、東京工業大学大学院非常勤講師、京都大学CKプロジェクト評価委員、北京 中央财经大学名誉教授、昭栄株式会社社外取締役、リクルート株式会社経営諮問委員会委員、私学審議会特別委員
【著書】「データで示す日本の大転換『当たり前』への回帰」(かんき出版 05年)、「税財政の本道」(東洋経済新報社 06年)、「平成の税・財政の歩みと21世紀の国家戦略」(納税協会連合会/清文社 06年)、「大変! ~その原因と対応~」(かんき出版 09年)



うち二、三〇〇万人、つまり四人に一人が確実に七五歳以上という社会が訪れる。このとき日本は移民を認めざるを得なくなると私は思う。その時、日本が手を組む相手は、ベトナムが相応しい。ベトナムは日本とは人口ピラミッドが全く逆である。日本語の話せる若者に日本に来てもらうのが、いちばん良いのではないか。それが、ベトナムで日本語普及と複式簿記を一緒に始めた理由である。

成長が続き、右肩上がりのときはどっぷり勘定でもいい。しかし、そうでなくなってきたとき、何を売って儲け、何を売って損を出したか、という分析が経営上不可欠となる。さらに、簿記を学ぶと数学のレベルがわかる。ハノイ貿易大学、ホーチミン貿易大学は文系も理系もベトナム最難関の大学で、私が教えていて実感したのは数学能力の高さだ。そうした日本語ができて理数系もできる人材が日本の大学の医学部に入り、日本の医師になつてくれればと思っている。実際、難民として日本にやってきて帰化した人の中には、医師として開業している人もいる。そういう人を増やしていければと思う。

アジアで日本が持つ信頼感

私がアジア各国で感じるのには、日本人特有の強い信頼感だ。実は、アジアの国々は信頼感をあまり持ち合わせていない。中国のお金持ちの友人宅に招かれて、食卓に必ずのぼるのは日本産の野菜やコメだ。「このコメは豊岡産のコシヒカリだ。豊岡はコウノトリを保護しているから低農薬でつくっている」と、言う。自国の野菜やコメの安全性

を疑い、かつ日本を信頼しているということだ。ベトナムも同様だ。彼らは決して銀行にお金を預けない。我々が教えている学生たちは銀行も証券会社も信用していない。ベトナムの通貨ドンは超インフレで、ほとんどドル経済になっている。少し金が貯まればドル、そして金に換えて持ち、本当の金持ちになれば不動産を買う。信じていないからだ。互いに信じられない社会では、どれだけ信頼できる友をつくるかが最も重要だ。中国会社ではクワンシー（関係）という。英語になるほど重要な中国社会のネットワークである。ベトナムも全く同様だ。

歴史を振り返ると、その理由がみえてくる。中国も、ベトナムも、韓国も革命で自分の将来が左右されてきた。今まで親しくしていた人と敵対し、前歴によって不遇を受け、失脚する。そうした歴史を、不幸にも彼らは経てきた。革命が起こらなかった日本が世界中で、例外と言つてよい。蛇口をひねれば水が出て普通に飲める。国民皆保険で病気になるれば病院で診てもらえる。行方不明になつたら皆で一生懸命に探してくれる——ベトナムの人々は、そう言つて日本を羨む。太平洋戦争後のアメリカとの戦いに、「我々は本当は勝っていない」とも言う。ベトナムの死者は二〇万人、行方不明者三〇万人、アメリカの死者は五万五〇〇〇人である。「負けたら歴史をつくり変えられる」ことを彼らはよく知っていた。だから、ギブアップしなかった。「日本人はなぜ、南京大虐殺に固執するのか。歴史は勝った人間がつくるものだ。過去を向いて議論しても仕方ない。戦争とはそう

いうものだ」と、私は彼らに教えられる。

アジアで人を育て共に伸びる

一九九二年二月のソ連崩壊以来、本当のグローバル化が広がったことを日本人は真に理解しなかったのではないか。今やアジアの発展を活用しない限り、日本のビジネスは成り立たない。そのとき、ベトナムであれば、日本語とベトナム語がわかって、かつ複式簿記にも税法も精通した人を雇用してほしい。

貿易大学の学長は日本語教育に熱心で、その学長からは日本流のビジネスマナーも教えてほしいという要望を受けており、今年の秋に試験的に実施する。日本に学ぼうという姿勢が強く、人材育成を望んでいる。明治のころ、日本に独立の応援を仰ぎたいと願ったベトナム人に、大隈重信は人材育成が先だと論じた。このベトナム人ファンボイ・チャウはホーチミンの父親の盟友だった。ホーチミンが残した言葉としてベトナムに伝わる名言がある。「二〇年先を見るなら木を植えろ。一〇〇年先を見るなら人を育てろ」。大隈重信の言葉である。

アジアの発展を活かし、共に伸びるようもう一度考えてみていただきたい。日本は覇権主義だとの心配には及ばない、とベトナム人は笑い飛ばす。最後に、CFO協会がFASBをアジアに輸出し、アジアに新しいルールづくりができることを心から期待したい。

※本稿は、二〇一〇年二月七日開催の「第10回CFOフォーラム ジャパン 2010」の講演内容を編集部にてまとめたものです。

